

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 砂と関わる／さいたま市立本太保育園（埼玉県）

砂や泥遊びは、保育の中で日常的に遊ぶ姿が見られる環境になっていますか？

また、子どもたちが砂や泥と関わる姿に注目して、話題になることはありますか？

今回は、子どもたちが主体的に砂と関わる姿に焦点を当てた事例をご紹介します。友達と考えを出し合ったり、互いの気づきを共有したりして、協力して遊ぶ過程に、「科学する心」に繋がる体験を読み取ることができます。



### 大きな山を作ろう／5歳児

#### ✦ 「どっちの山が高いかな」

- 6月中旬、クラスみんなで“ドロコ遊び”<sup>※</sup>を楽しんだ翌日、子どもたちの興味を捉えて、砂場にいる子どもたちに、大きなシャベルを出すことにした。すると、山作りが始まる。
- 2つのグループができ、2つの山を作り始める。  
Aちゃん：「女たちには負けないぞ」  
Bちゃん：「男たちには負けないぞ」  
Cちゃん：「女の方が人数多いじゃん」などと、互いに競争しながら砂を積み上げていく。  
Dちゃん：「天井までいくと、すごいね」
- もっと大きくしたいと願いながらも、お互いの山を認め合い、2つの山を見比べる子どもたち。  
Eちゃん：「もう、これで終わり」  
Fちゃん：「固めよう」  
Gちゃん：「まだ早いよ」
- 次の段階に移りたい子どもがいる一方、まだまだ大きくしたい子どももいた。



<sup>※</sup>2011年度の東日本大震災の影響による放射能への心配から、自粛していたドロコ遊び（体全体で泥の感触を楽しんだり、ダイナミックに泥と関わったりする遊び）、保護者の理解も得て、2015年度より復活した遊び。

#### ✦ 「しっかり固めよう！」

- シャベルの背を使い叩いて、山を固める。そこに、他の子どもが砂を積み上げる。  
Hちゃん：「ペタペタしてから、砂をかけても落ちちゃうんだよ」  
Iちゃん：「固めると、ツルツルになるから砂が落ちるんだ」
- みんな、Iちゃん言葉に納得する。そして、叩いて固めたことにより、表面が平らになって抵抗が減り、砂が落ちていくことに気が付いた様子。ある子どもの「白砂をかけよう」の提案にみんなで山の上から白砂をかけ始めた。



## ✦ 「私はここから 僕はここから（穴） 掘るね」

- 2つの山は、だいぶ固まってきたので、保育者は、この後どうするか子どもたちの思いを聞いてみる。  
Aちゃん：「穴掘ろう、みんな」の声に、その場にいるみんなが賛成する。  
Bちゃん：「ぼくはここから掘るね」  
Cちゃん：「私は…」と山越しにいる友達を見て、「Yちゃんと繋げよう」  
Dちゃん：「結構大変だよ」  
Eちゃん：「誰と繋がるか分からないから楽しみだね」
- 山を囲んでそれぞれが自分の穴を掘り始めた。



## ✦ 「まだまだ、もっと奥に繋げよう」

- Fちゃん：「真っすぐは、なかなか繋がらないよ。曲がり角を作るといいよ」と、前に掘り進めるより、隣の友達と繋げた方が簡単に繋がることを発見する。隣同士で繋がり始めると…。
- Gちゃん：「繋がっている。明かりが見えるよ」と、外の光がトンネルの中に入ってくるのを感じていた。

## ✦ 「みんなで壊しちゃおう！」

- それぞれの穴がトンネルの様に繋がって、喜ぶ子どもたち…。  
次第に、山にヒビが入る。  
Hちゃん：「ヒビは直せばいいんだよ」と、ヒビがはいった部分を叩いて、ヒビの線を消そうとする。  
しばらくして、徐々に山が崩れ始める。  
Iちゃん：「あっ、崩れた」  
Jちゃん：「じゃあ、崩すしかないね」の声にみんなが一斉に山に登り始め「きゃー」「わぁー」と歓声をあげて、今度は、山を崩すことを楽しんでた。そして、みんなですれた手を見せ合い、満足そうであった。  
Kちゃん：「すごーい山を作ったけど、壊しちゃったんだ！」  
保育者：「残念だったね」  
Lちゃん：「全然いいんだ。また、作るから…」



## ✦ 考察

- 山をさらに固くする方法が「白砂をかけて叩いて固めること」だった。日々の団子作りの際に少し湿った黒砂で形を作り、それに白砂をまぶしながら固めていくという経験が、クラスの中で共有されていることから、それを山作りに応用したと思われる。
- それぞれの思いを伝え合い、考えを調整し合いながら、1つの物を作り上げていく喜びを感じているようだった。主体的に進め、友達と満足いくまで遊び、この砂山が壊れたとしても「また、作るから」と言う子どもたちの姿に成長を感じた。
- 子どもの遊びの姿を写真に撮り、時系列でファイルして保護者に知らせることは、保育者と保護者にとって、相互理解や子ども理解に繋がった。

## ○ 日々の保育を保護者に伝える工夫

日々の保育の様子を保護者に伝える手段として、以前から写真を利用していた。さらに、遊びの経過を時系列でファイルしたものを作成（右図参照）したところ、静止画の面白さ・良さを感じた。子どもの活動の一場面を切り取った静止画は、「受け手の思いの幅」が広がるため、遊びの前後の様子や状況等を説明し合う必要が生じる。そのため、子どもと保護者、保護者と保育者が、「遊びや保育を語り合う」姿がさらに多くなり、お互いが伝え合う内容も変化していった。



無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム  
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」